

—編集後記—

昨年4月より、編集委員を担当しております。Mail会議には毎回参加しておりますが、編集委員としての実質的な仕事はまだ担当しておらず、これが初仕事です。まずは、これまでの編集後記および巻頭言をあらためて幾つか拝読し、ホームページや学会会則などにも初めて真面目に目を通しました。その中で、現在の会員数は約400名であること、それに対して、「古典」とも言うべき半世紀余り前の「土壌の物理性」第1号（1959年3月）の第一刷は当初300部だった（予想外に農業各分野からの入会員数が多く、さらに200部増刷した）ことなど、初めて知ることが多くありました。小規模な国内学会の存在意義は何だろうと考えることがありますが、この「古典」の巻頭言（山中金次郎氏と松尾英俊氏）を見る限り、本誌（本会）は、土壌物理学自身の進展のために作られたというよりは、むしろ、土壌物理学と他の分野との融合・交流を最大の目的として作られたのだと思います。山中氏はこのときすでに「土壌物理の伸び悩み」に言及し、すべての分野の人に愛される土壌物理になることが必要と述べており、続く松尾氏もまた、農学以外の広い

分野の方々の参加を願う言葉を書き記しています。すなわち、他の分野との融合がもたらす未知なる反応への大きな期待感こそが、先人達が学会を立ち上げる最大の駆動力だったと想像します。これはおそらく、今でも当てはまると思います。会員数が再び増加に転ずるためにはどうしたらいいのだろうと考えることがありますが、「多様な研究者から構成されることが好ましい」（学会ホームページ：土壌物理学会入会のお誘い）というレベルよりも、むしろ、ヘテロな集団を構成することそのものがこの小さな学会の「設立目的」であり今も一番の「存在意義」と考えてみるのはどうでしょうか。学会を動かす駆動力としての大きな動水勾配や濃度勾配は、土壌物理学を知らない人達を取り込んでこそ形成されるものかもしれません。土壌物理学ではとても手に負えないような何が起こるか分からないような未知の世界へこの学会を積極的に放り出していくことが、新しい駆動力を生み出す一番の近道かもしれません。

江口定夫（編集委員）

土壌物理学会

事務局構成	会 長	井上	光弘	(鳥取大学)
	副 会 長	加藤	英孝	((独)農業環境技術研究所)
	庶務幹事	木原	康孝	(島根大学)
	庶務幹事 (会長付き)	猪迫	耕二	(鳥取大学)
	会計幹事	森	也寸志	(島根大学)
	編集幹事	藤巻	晴行	(筑波大学)
	会計監査	石黒	宗秀	(岡山大学)
編集委員会	委 員 長 委 員	増永	二之	(島根大学)
		諸泉	利嗣	(岡山大学)
		江口	定夫	((独)農業環境技術研究所)
		川本	健	(埼玉大学)
		北川	巖	((独)農業・食品産業技術総合研究機構)
		小杉	賢一朗	(京都大学)
		齊藤	広隆	(東京農工大学)
		鈴木	伸治	(東京農業大学)
		近森	秀高	(岡山大学)
		取出	伸夫	(三重大学)
		中村	公人	(京都大学)
		中矢	哲郎	((独)農業・食品産業技術総合研究機構)
		原口	暢朗	((独)農業・食品産業技術総合研究機構)
		藤川	智紀	(東京農業大学)
望月	秀俊	((独)農業・食品産業技術総合研究機構)		
渡辺	晋生	(三重大学)		